

第104回 三方限古典塾（'15, 6, 18）

洪 自誠（1561～1616）「菜根譚」（その3 - 21）

1 大人は畏れざるべからず。大人を畏るれば、則ち放逸の心無し。小民も畏れざるべからず。小民を畏るれば、則ち豪横の名無し。 前集 212

（意識） 徳の高い立派な人に対しては、畏れ敬う心を持たなければいけない。そうすれば、自分に勝手気ままなふるまいをする心が起きなくなる。

また、一般の人に対しても、やはり畏れ敬う心を持たなければいけない。そうすれば、おごり高ぶっていて勝手気ままだという悪評が自分に立たなくなる。

（余説） 人を畏れるということはお互いに生きていくというその事実に対して尊敬の念を持ちながら、その人に接するという事です。それは、地位とか友人とか年齢とかに関係はありません。特に、人と接するにも節度、つまり一定の車間距離を保つことが必要であり、誰に対しても狎れ狎れしく侮ることだけはしないという人生の心がけです。

（参考） 論語・季子(428)「君子に三畏有り。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。小人は天命を知らずして畏れず、大人に狎れ、聖人の言を侮る。」
（ここでいう天命とは、天によって定められた人の不可知な宿命です。）

2 事稍拏逆するときは、便ち我に如かざるの人を思わば、則ち怨尤自ずから消えん。心稍怠荒するときは、便ち我より勝れるの人を思わば、則ち精神自ずから奮わん。 前集 213

（意識） 物事がどうにも思い通りにいかないときは、自分には及ばない人のことを考えると、自分の境遇を怨みとがめるような心は、自然に消えていくだろう。

また、心が少しばかり怠り荒れるような時には、自分よりすぐれた人のことを考えると、心は自然と奮い立ってくるであろう。

（余説） 様々な場面において、自分の感覚や感情をいかにして本来在るべき状態に自己コントロールするかです。とかく、人の境遇をうらやみたくなるのが人情であり、人と比べることの愚かさは分かっている、いざとなると凡人には難しいのが現実です。

しかし、同じ比べるのであっても、比べる基準を変えることによって次善の策になりうるといふ菜根譚の教えは役に立ちそうに思われます。

禅宗においては、何かと比較して相対的に対立させる考え方をいついかなる場合でも厳しく戒めて絶対性を重視します。例えば、2 寸の棒は1 寸の棒よりは長いですが、3 寸の棒よりは短かく、絶対的に長い棒もなければ短い棒もありません。人の心がそれを何と比べるかに応じて、長くも短くもなるというのです。

（参考） 金剛経 「応無所住而生其心」（応に住する所無くして其の心を生ずべし）

臨濟宗 「随所作主立処皆真」（随所に主と作れば立処皆真なり）

明治天皇 「ともすれば うきたちやすき 世の人の ころのちりを いかでしずめむ」

（日露戦争から3年の明治41年・1908年に詠まれた歌）

3 喜びに乗じて諾^{だく}を軽くすべからず。酔いに因^よりて嘖^{いかり}を生ずべからず。快^{かい}に乗じて事多くすべからず。倦^{けん}に因^よりて終りを鮮^{せん}なくすべからず。 前集 214

(意識) なにか喜ばしいことがあるからといって、それに調子よく乗って、軽はずみに承諾してはならない。酒の酔いにかこつけて、むやみに怒りを爆発させてはならない。物事が好調に進んでいるからといって、むやみに手を広げすぎてはならない。飽きて嫌になったからといって、最後をいい加減にしてはならない。

(余説) 我が身にはどれも幾度となく覚えがあり恥ずかしい限りです。自分の人生に生ずるできごとはずべて自分に責任があると自覚して、自分の言行に対してはあくまでも責任を負う覚悟を持ちたいものと、日頃から考えてはいるのですが。

特に日本人は、酒で上機嫌になって警戒心が薄れ、仕事上の情報を安易に漏らすなど、セキュリティに対する意識が甘い傾向があるという指摘もあります。

(参考) 詩経・大雅 「初めあらざること靡^なし。克^よく終わりあること鮮^{せん}なし。」(何事でも、初めはともかくもやっけていくが、それを終わりまで全うする者は少ない。)
上杉鷹山^{ようざん}「為せば成る 為さねば成らぬ 何事も 成らぬは 人の為さぬなりけり」
米沢藩主・治憲(1751-1822) 藤沢周平「漆の実のみのる国・上下」(文春文庫)

4 善く書を読む者は、手舞い足踏む^{と しんやわら}の処に読み到るを要して、方めて筌蹄^{せんてい}に落ち^{はじ}ず。善く物を観る者は、心融け神^と治^{しん}ぐの時に観到るを要して、方めて迹象^{せきしょう}に泥^{なず}まず。 前集 215

(意識) 書物をしっかりと読もうとする人は、喜びのあまり、手で舞い足を踏んだりして小躍りするまで読み極める必要がある。そうしてはじめて、陥りやすいわなにかからず、神髓に触れることができる。事物の真実の姿を観察しようとする人は、心はその事物と融和して一体になるまで観察し尽くす必要がある。そうしてはじめて、物事の外面にとらわれずにその本質を捉えることができる。

(余説) 哲学者で教育学者である森信三^{のぶぞう}に「人間は一生のうち逢うべき人には必ず逢える。しかも、一瞬早過ぎず、一瞬遅すぎない時に」という箴言があります。これまでの生涯を振り返ると、ほんとうにそのとおりで実感できます。さらにわたしはこの箴言の「人」を「言葉」に置き換えることもできると考えています。

ただ人の場合でもそうですが、その言葉を本の中などで出逢ってもその大切さに気づくとは限りません。最近知的能力の老化もあって、“これは”という本はできるだけ3回は読むことに努めています。2回目・3回目で著者が言いたかった本当の意味に気づくことが多くあります。その時が「一瞬早過ぎず、一瞬遅すぎない時」であるように感じられます。出逢いというものがもっている不思議さです。

帝国海軍きつての知性と言われ、無謀な対米戦争を終始批判的し、敗戦前夜は一億玉砕を避けるべく終戦工作に身命を賭した海軍大将井上成美^{しげよし}も、本は三回読んだそうです。

(参考) 孟子^{りょう}・離婁上25「(悦びて)足の之を踏み、手の之を舞うを知らず」
史記^{いへんさんせつ}・孔子世家「韋編三絶」(孔子が晩年「易経」を好んで読み、綴じた革ひもが何度も切れたという。繰り返して読むこと。熟読。韋編三たび絶つ。)